

# 生徒のモチベーションを促進させる理論を授業に応用した試みの考察

M17EP002

芦沢 友也

## 1. はじめに

2020年の東京オリンピック開催を控え、日本人の英語に対する意識調査として行われた『グローバル化と英語に関する実態調査』(2013)によると、「英語力」、「英語の必要性」、「英語に対する意欲の高さ」が全項目で平均を上回ったのは大学生で、年代が上がるにつれ、それらは大きく低下することが分かった。また全体の自身の英語力については、41.6%が「英語は話せない」、30.4%が「(挨拶や食事のオーダーなど)単語を羅列させる程度」と回答。両者を合わせると全体の7割以上が「英語をほとんど話せない」と答えている。この結果から日本人は大学生を境に英語に対する意欲が減退してしまう傾向がある。

高校の教育現場で生徒の英語に対する意欲を長年見ていると、多くの生徒は大学への合格が、英語学習のゴールになってしまっているのではないかと感じる。大学合格後に、英語学習へのモチベーションが高まらない要因としては、日常的に外国人と英語でコミュニケーションを取る必要がない環境などの理由が考えられる。外発的動機付けは外部から与えられる報酬(合格)により即効性はあるが、達成してしまうと、取り組むもの自体への興味は急速に薄れると言われている。多くの生徒は大学までの英語学習が、このような外発的動機付けに支えられている部分が多いと考えられる。これからのグローバル化が求められる社会において、持続的な英語学習の鍵となるのは内発的動機付けが重要になるのではないだろうか。内発的動機付けは、やる気が人の内側から湧き上がってくる動機付けで、自分の有能さや、創造的に活動することが快感であるような内面の欲求が動因となって行

動を起こすものである。現在、ビジネス、学術、心理学などに応用されている内発的動機付けのモチベーション理論は数多い。そうしたモチベーション理論を英語教育の授業の中に導入し、生徒に有効なのかを今回検証したい。

## 2. 第二言語学習と動機付け

過去の研究からも、動機づけと学習とは切っても切り離せない存在にある。多くの研究において、高い動機づけを持った学習は、高いレベルの達成度が得られると考えられている。有名な研究として、Gardner と Lambert の Attitudes and Motivation in Second Language Learning (1972) がある。フランス語を学ぶカナダ人学習者に対する研究から、学習動機を統合的動機づけと道具的動機づけに分け、前者による学習の方が、習熟度が高かったとした。

Krashen は、言語習得における情意フィルター的重要性を指摘し、学習者の動機が低いとき、過度に緊張しているとき、学習に不安を感じているときはこの情意フィルターが高くなり、言語習得が困難になるとしている。

また学習をする際の障害を乗り越える自信を動機付けが高める述べている。

Gagne と Driscoll によると動機付けは学習者が途中であきらめないように、意欲を促進する存在であり、心理的サポートとして機能するとしている。

近年は、Deci と Ryan による自己決定理論 (Self-determination theory) が注目を浴びている。自律性の欲求、有能性の欲求、関係性の欲求が自己決定理論の核になる。自律性の欲求とは、自分の行動が自己決定的で

あり、責任感を持ちたいという欲求であり、有能性の欲求とは、やればできる、という自信や自分の能力を示したいという欲求であり、関係性の欲求とは、周囲の人や社会と密接な関係を持ち、連帯感を味わいたいという欲求である。

### 3. 高等学校における動機付けの現状

平成26年に文部科学省が発表した『今後の英語教育の改善・充実方策についての報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～』において、高校英語教育の課題として動機付けを以下のように取り上げている。「グローバル化に対応した英語改革の改善として、学校における学習が、生涯にわたって、自ら外国語を学び、実際にコミュニケーションで使おうとする動機付けに結びつけ、維持する必要がある」としている。文部科学省はこれからのグローバル化社会を見据えて、現在の高校の教育現場において英語に対する動機付けは生涯に渡る重要な課題であると定義している。つまり学習者の英語に対する取り組みは動機付けに左右される可能性がある。

では実際に教育現場では生徒に対して、確かな動機付けの理論に基づいて、授業が展開されているのだろうか。おそらく英語学習の動機づけに関しては、現場ではさほど意識されず、教師個々の経験によるところが大きいのではないだろうか。ただ実際に経験のある教師の試みは、結果としてモチベーション理論に基づいていることもある。例えば褒めて生徒をやる気にさせる、生徒の興味を刺激することにより、生徒がやる気になったというようなことは教育現場ではよく耳にする事である。ただ職場内での教師の多忙化や、大学合格を目的とした受験のテクニックに重きが置かれている傾向があり、残念ながら生徒への動機付けに関しては、理論的な裏付けがされないままに実践され、教育現場では軽んじ

られている傾向があるのではないだろうか。

### 4. 動機を高める理論

組織心理学者の田尾雅夫氏によると、モチベーションの語源はラテン語の” movere” であり、英語の” move” に相当する、「何かを求めて動かす」から由来する。モチベーションは「何か目標とするものがあって（誘因）、それに向けて、行動を立ち上げ、方向付け、支える力（動因）」であると定義している。モチベーション理論は1950年代より本格的な研究が始まり、現在100以上のモチベーション理論が生み出されている。以下主要な理論を取り上げる。

表1 動機を高める理論

理論	作成者	内容
理解への欲動	P. Lawrence	人は好奇心を満たす事や自分の周りの世界を良く知りたと思う欲動がある。
関係性の欲求	E. Deci	人は誰かと結びついている欲求がある。
自己認知論	J. Bem	自己の行動や周囲の反応といった『外的手がかり』から推測して知りたと思う。
目標設定理論	E. Locke	目標の明瞭性が高いと、はっきりした期待や確実な行動を方向づけすることができる。
実用志向	市川伸一	六つの学習動機の中で、一番モチベーションが高まるのは実際に仕事や生活に役に立つと考えられる実用志向である。
自律性の欲求	E. Deci	自ら行動を選び、主体的に動きたいという欲求がある。
期待理論	V. Vroom	人は期待や魅力の2つの要因でやる気の大きさが決まる。
エンハンシング効果	L. Dec	ほめ言葉や激励は、作業量を増大させ、学習を促進する上で効果的である。

公平理論	S. Adams	人は他者と公平に評価されていないと感じるとモチベーションが下がる。
ピグマリオン効果	R. Rosenthal	人は期待された通りの成果を出す傾向がある。
自己肯定感	A. Bandura	自分が行為の主体であると感じるような自己に対する信頼感や有能感を表す。
効能感	A. White	人は有能感を覚えることによって、次なる行動に向かっていくモチベーションを維持することができる。
フロー理論	M. Csikszent mihalyi	内発的に動機づけられた自己の没入感覚を伴う経験を得る。

## 5. 授業実践研究

### 5-1 本研究のリサーチクエスション

『生徒のモチベーションを促進させる理論を授業に応用することにより、生徒のやる気を高めることは可能か』

### 5-2 具体的な研究方法

研究実習校において、モチベーション理論を取り入れた授業実践を5回行う。各回を比較、分析するために、毎回、それぞれに異なったモチベーション理論と英語教授法との融合を図る。教材は教科書のレッスンを1回で終えるダイジェスト版として作成し、各回を可能なかぎり同じ条件で、授業で行うことを心掛けた。新出単語は最小限に抑え、新しい文法は導入せず、教科書の内容を中心に教えることで統一を図った。

### 5-3 授業を行うクラスについて

今回は研究実習校の中学2年生、23人に対して5回の授業を実践した。事前の授業観察を通して、実習を行う学校の生徒達は授業全般に、比較的前向きな生徒が多かった。実習校の英語の先生と相談し、比較的一番大人しく、モチベーションが低いだろうと思われる2年生のクラスを対象クラスとした。各回の内容

に有効だと思われるモチベーション理論の組み合わせを考え、授業を展開した。

### 5-4 授業実践

第1回授業 教科書 Sunshine Program 11  
” Yui- to Share is to Live”

#### 通常の授業

通常行われている教師の手順で授業を実施する。特にモチベーション理論を導入せず、基準のデータとする。

表2 第1回授業展開

活動	内容
Q and A	ALT の質問に手を挙げ、答える。その後に ALT に質問をする。
新出単語の導入	フラッシュカードを使い、発音と意味を確認する。
本文の内容理解	本文を ALT の後に続いて、読む。内容を質問しながら確認する。
ワークシート	内容確認ワークシートを行う。

第2回授業 教科書 Sunshine Program 5  
” Gulliver’s Travel”

#### 取り入れる理論

##### ①理解への欲動

ICT 機器を積極的に活用し、生徒のわかりやすい理解を補助する。教室内の大きなスクリーンを利用し、パワーポイントで授業内容を作成し、音楽、動画を使い、生徒の理解をより容易にする。

##### ②目標設定理論

ALT と相談し、この授業で生徒が目標を意識させる魅力的な目標を設定する。  
” International People”

##### ③実用的志向

ALT に自分の発音が通用することにより、英語が実際に役立つことを実感する。

表3 第2回授業展開

活動	理論	内容	意図
歌を使ったアクティビティ	①	スクリーンに歌の動画を流す。歌を歌いながら前置詞を確認する。	スクリーンに歌の歌詞を掲示し、知覚しやすくする。
今日の目標	②	スクリーンに今日の目標を表示する。	International People
世界の文学クイズ	①	PPT で世界の有名な文学作品の写真を提示し、尋ねる。	スクリーンに文学作品の写真を掲示し、知覚しやすくする。
ガリバー旅行記の動画クイズ	①	ガリバー旅行記の動画を使い、次の展開はどのような事が起こるのかを推測する。	スクリーンにガリバー旅行記の映画の動画を流し、知覚しやすくする。
新出単語導入	①	PPT に単語とイラストを提示する。	スクリーンに単語の意味とイラストを結びつける。
本文の内容理解	①	英文を読み、内容を確認する。	スクリーンに本文を提示し、知覚しやすくする。
本文の発音練習	③	ALT は生徒に背を向け、生徒は各列ずつ本文の一文を読む。	生徒が実際に自分の発音が ALT に通用する事により自信に繋がる。

第3回授業 教科書 Sunshine Program 6 ” A Work Experience Program ”

取り入れる理論

②目標設定理論

ALT と相談し、この授業で生徒が目標を意識させる魅力的な目標を設定する。

“Catch a Dream”

④関係性の欲求

ペアーワーク、グループワークの共同的活動からモチベーションを高める。他者との関係性を意図的に増やす。

表4 第3回授業展開

活動	理論	内容	意図
ピクチャーしりとり	④	各列ごとにチームになり、黒板に順番に英単語の絵でしりとりを書いていく。	列をチームとして、他者との関係性を高める。
目標提示	②	黒板に今日の目標を書く。	Catch a dream
憧れる職業	③	日本人とアメリカ人の中学生が憧れる仕事を提示する。	将来役に立つ情報。
仕事マッチングアクティビティ	④	4人組のグループでばらばらになっている仕事の英単語とその説明を正しくマッチングさせる。	4人ごとのグループで、他者との関係性を高める。
仕事適性アクティビティ	④	ペアになり、一人が心理的な質問を行い、パートナーが Yes, No で答えていく。最後にどのような仕事が向いているのかに辿り着く。	2人ごとのペアで他者との関係性を高める。
なりたい職業の英作文作成	④	2人組の同じペアで、自分のなりたい仕事と簡単な理由を英作文にする。	2人ごとのペアで他者の関係性を高める。
新出単語の導入		新出単語を生徒がリピートをして、意味を確認する。	
本文の導入	④	英文をリピートし、本文をワークシート上の写真を手掛かりに内容を確認する。ペアで交互に読む。	2人ごとのペアで最後に英文を読む事により関係性を高める。

第4回授業 教科書 Sunshine Program 10 ” So Many Countries, So Many Customs ”

取り入れる理論

⑤自己認知論

生徒の認知を促す授業を意図的に展開する。授業の目的を提示せずに、生徒の認知の外にある世界の文化や習慣を紹介し、生徒が主体

的に授業内容を認知するように促す。ペアでそれぞれが異なる情報を所持し、自分の知らない情報を認知したいという気持ちを喚起させる。

表5 第4回授業展開

活動	理論	内容	意図
音楽を使った Q and A	①	音楽を流し、ボールを回し止まった時にボールを持っていた生徒が質問に答える。	現在、アメリカで人気の曲を流し、海外に対する意識を高める。
海外の習慣についての問題	① ⑤	海外の習慣の一場面見せる。それぞれのシーンに対して質問をする。なぜ見せたのかは言わない。	授業の目標を話さずに生徒にとっては認知の外にある海外の習慣を見せることにより、新しい知識に対する興味を持たせる。
アメリカの文化についての問題	⑤	ワークシートの例がアメリカの習慣として正しいかを○×で答える。正解を ALT が答える。	日本人にとって新鮮なアメリカの習慣について興味を持たせる。
目標提示	⑤	生徒に今日の学習は何かを尋ねる。	生徒は今日の学習の内容を何かを自分で考える。
新出単語の確認		新出単語を生徒がリピートをして、意味を確認する。	
インフォメーションギャップ	④ ⑤	ペアになり、それぞれが異なる情報を読み、一人が質問し、一人が答えることを交互に行い、本文の内容をお互いに確認していき、答え合わせを行う。	お互いに知らない情報をパートナーに求め、情報を認知しようとする。

5回授業 教科書 Sunshine Program 9  
” A Video Project”

複数のモチベーション理論を統合した授業

### ①理解への欲動

PPT とスクリーンを利用し、生徒の理解を容易にする。実際のクラスメートの学校紹介など、オーセンティックな教材を利用する。

### ②目標設定理論

ALT と相談し、この授業で生徒が目標を意識させる魅力的な目標を設定する。

“School Master”

### ④関係性の欲求

クラスを一つのチームとして、全員がクイズに最後まで残ることにより、お互いの関係性の意識を高める。

### ⑤自己認知論

ペアでそれぞれが異なる情報を所持し、自分の知らない情報を認知したい気持ちも喚起させる。

表6 第5回授業展開

活動	理論	内容	意図
ヒューマンサウンド	①	動画で人間の生理現象の英語の表現を見る。動画の最後の部分で復習としてリピートする。	リズムカルな音楽と動画で知覚しやすくする。
目標設定	②	スクリーンに今日の目標を提示。	School Master
連携協力校クイズ	④	全員起立をする。連携協力校の問題に手を挙げて答える。正解の生徒は立ち続ける。間違えた生徒は座る。最後まで残っていた生徒が勝者。	クラス全体を1つのチームとして捉え、全員参加の活動を行う。
ビデオプロジェクト	①	連携協力校の2人の生徒の部活動紹介の動画を見せる。ワークシートの空欄になっている箇所を英語で聞き、答える。本人に聞きながら答え合わせをする。	実際の生徒をオーセンティックなマテリアルとして動画を作成し、他の生徒が知覚する事を容易にする。
新出単語の導入	①	PPT で新出単語、イラスト、例文を表示。単語、例文の発音、意味の確認を行う。	イラストを単語、例文と結び付け、知覚を容易にする。
インフォメーションギャップ (本文)	④ ⑤	ペアになり、それぞれ異なる情報を読み、一人が質問し、一人が答えることを交互に行い、本文の内容をお互いに確認していく。答え合わせを行う。	お互いに知らない情報をパートナーに求め、認知をしようとする。

## 5-5 調査結果の分析

OPP シート内で、モチベーション理論が効果的であったかを明らかにするために、質問項目のアンケートを実施した。また一言コメントより、生徒のモチベーションの状況を検証する。併せて第1回目の授業でモチベーションが低かった2人の生徒の分析も行った。

### 5-5-1 アンケート結果

#### 第1回授業アンケート

勉強に対して前向きな生徒が多い。やる気がある生徒の割合が85%と、多くの生徒のモチベーションは初めから高かった。特に目標を設定しなかった授業の目標の理解度は、83%だった。第1回のデータを基準とする。

表7 第1回授業アンケート

アンケート項目	動機付け理論	肯定的な割合
今日の授業の目標はわかりましたか。	目標設定理論	83%
今日の授業は役に立つ知識だと思えましたか。	実用性志向	85%
今日の授業はやる気が起こりましたか。	動機付け理論全般	85%

#### 第2回授業アンケート

今日の授業はやる気が起こりましたか？

2回 91% | 1回 85%

[目標設定理論]

(今日の授業の目標はわかりましたか？)

2回 90% | 1回 83%

[実用志向]

(今日の授業は将来役に立つ知識だと思えましたか？)

2回 90% | 1回 85%

生徒のコメントより抜粋

『理解への欲動』

「パワーポイントをつかっていてとても分かりやすかった」「ガリバーの映像を見て面白かった」「ガリバーの歴史がよく理解で

きた」「英単語を歌で覚えることができた」「解説もあり、わかりやすく勉強できたので良かったです」「映像で見たカズオイシグロを読んでみたくなった」「ガリバーの映像から答えを推測する所が良かった」「動画等を使いよくわかりました」

#### 第3回授業アンケート

今日の授業はやる気が起こりましたか？

3回90% | 1回 85%

[目標設定理論]

(今日の授業の目標はわかりましたか？)

3回90% | 1回 83%

[実用志向]

(今日の授業は将来役に立つ知識だと思えましたか？)

3回92% | 1回 85%

生徒のコメントより抜粋

『関係性の欲求』

「一緒に活動して、将来の仕事のために役立つとおもった」「友達と話し合ってた楽しかった」「職場に関するゲームをしたことが楽しかった」「友達に自分の夢を英語で言えるようになってよかった」

「ペアワークはちゅうちょする」

#### 第4回授業アンケート

今日の授業はやる気が起こりましたか？

4回 90% | 1回 85%

[実用志向]

(今日の授業は将来役に立つ知識だと思えましたか？)

4回 91% | 1回 85%

生徒のコメントより抜粋

『自己認知論』

「知らなかった事をたくさん知ることができて、オ～となった」

「アメリカと日本の文化がまったく違っているとわかった」「ALTの先生から文化の違いを聞いて新鮮な気がした」

「日本と世界の違いがはっきりわかってよかった」「文化の違いがわかって面白かった。ホームステイしてみたい」「アメリカの常識がわかった。アメリカに行くときに生かす」

#### 第5回授業アンケート

今日の授業はやる気が起きましたか？

5回	90%	1回	85%
----	-----	----	-----

〔目標設定理論〕

今日の授業の目標はわかりましたか？

5回	91%	1回	83%
----	-----	----	-----

生徒のコメントより抜粋

『理解への欲動』

「ムービーで学校のことが知れて良かった」「映像を見たり、聞いたり新しい感覚だった」「新しい単語などはパワーポイントなどで説明してくれるのはとてもわかりやすかった」

『関係性の欲求』

「今日は英語でしっかり聞いた」「協力して英語が読めた」

『自己認知論』

「お互いに協力して英語を話せた」「今日の授業は楽しいし、いろいろな方法で学べて楽しかった」「自分たちの学校の事が自分がよくわかっていておどろいた。あつという間に感じるくらい楽しかった」

「外国にはソフトテニスがないと聞いて驚いた。初めて知ることがあって楽しかった」

#### 5-5-2 動機付けの低い生徒に対する授業の効果の分析

第1回授業の終わりのOPPシートより、モチベーションが50%以下だった生徒が、2名存在した。質的研究として動機付けが低い生徒のその後の変容を、自己評価とコメントから分析する。

【生徒A】能力は低い。おとなしい。

「今日の授業はやる気がありましたか？」

表8 生徒A アンケート

1回	25%	「英語だけなぜかねむい」
2回	50%	「もうちょっと練習したい」
3回	75%	「身近な所でも英語が必要になったのでがんばらなければ」
4回	75%	「自分からやろうと思えてきた」
5回	75%	「やっと少しよめるようになった」

【生徒B】英語は嫌い。おとなしい。

「今日の授業はやる気がありましたか？」

表9 生徒A アンケート

1回	50%	コメントなし
2回	75%	「in on under」
3回	100%	「がんばった」
4回	75%	「がんばった？」
5回	75%	「ありがとうございました」

## 6. 考察

今回の研究は動機付けに関する研究であったが、当初より勉強に対してモチベーションが高い生徒たちに、その成果を測ることは授業を行う前の観察の段階から、難しいのではないかと感じていた。

2回目の授業からモチベーション理論を取り入れた実践を行った。スクリーンを使用し、写真や動画を中心とした授業を展開した。生徒の感想で一番多かったのは「わかりやすく理解できた」というコメントだった。視聴覚機器を利用して、生徒の理解を容易にすることにより、やる気を高めることに繋がるのではないだろうか。

3回目の授業は、人の関係性に注目し実践を行った。6人からなる列ごとから、4人のグループワーク、ペアワークと多い人数から少ない人数へと段階を踏んで実施をした。観察を通して、他者のためにお互い協力しよう

とする姿勢は皆から感じられた。ただアンケートに「他者との活動に躊躇する」といったコメントから、人間関係により、誰と活動するかは重要な要素になるのではないだろうか。

4回目の授業は意図的に生徒の認知を喚起するために、まず生徒達にはこの回の授業の目的を伝えなかった。当初生徒は意図した通り、今何が行われているのだろうか、必死に考えている様子が伺えた。活動の後に、生徒に今日の目的について尋ねると、多くの生徒が理解をしていた。自ら認知できることはやる気につながるのではないだろうか。ただ能力の低い生徒は、教師が意図した目的を理解できず、置き去りになる可能性もあるので別の手立てが必要だと感じる。

5回目の授業は今までの授業で取り入れた理論を、バランスよく授業内に配置し、実践した。アンケートの結果やコメントからも肯定的な意見が多かった。バランスよくモチベーション理論を適材適所に使用することが、集中力を高めたり、より意欲を喚起したりする効果につながるのではないだろうか。

今回のアンケート結果では、その上げ幅はもともと高い数値だったこともあり、小幅のものであったが、どの回においても生徒のやる気は上昇した。生徒のコメントからも理論が有効だと思われる記述が多かった。

また動機付けの低い生徒達への授業の効果の分析では、生徒 A のアンケートは初回より上昇している。コメントからも前向きに変わっている様子が伺える。生徒 B はコメントからは正確に読み取れないが、やる気は上がっているように感じられる。2人のアンケート結果からは、全体的に前向きに変容している様子が伺える。

以上の事より、生徒のモチベーションを促進させる理論を授業に応用することは、生徒のやる気を高める効果に繋がるのではないかと考えられる。

## 7. おわりに

今回、私は多くのモチベーション理論を学ぶことから研究をスタートさせた。ビジネスや医療、人生など多くの分野に有効なモチベーション理論は、確かに教育の分野においても有効だと考える。ただ5回目の授業のように一つの理論に頼るのではなく、教材の内容や状況において適切に利用することが重要になると感じる。今回の研究では、モチベーション理論をどのように授業と融合するかが一番難しいところであり、毎回授業を行う前に多くの時間を割いて考えた。日々忙しさに追われる教育現場では、腰を据えて自分の考えている授業のアイデアを十分に組み立てていた。経験豊富な指導教官の指導を毎回丁寧に頂き、試行錯誤を出来たことは教師として至福の経験であった。この経験を現場で還元することは当然であるが、教師として研究実践を行う事は、自分をより高めることになり、教員として新しい扉を開けたような気持ちになった。これからは教育者として研究者として学校現場で研鑽に励みたい。

## 引用文献

- クロス・マーケティング(2013)「グローバル化と英語に関する実態調査」マーケティング・リサーチ会社  
<https://www.cross-m.co.jp/report/workstyle/en20131216/> (参照2018. 2. 13)
- 池田光(2008)「図解基本からわかるモチベーション理論」イーストプレス
- 鹿毛雅治(2012)「モチベーションを学ぶ12の理論」金剛書店
- 文部科学省(2014)「今後の英語教育の改善・充実方策についての報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」
- Richard Ryan&Edward Deci (2009) Self Determination Theory The Guilford Press
- Robert Gagne (1977) The Conditions of Learning Thomson Learning
- Robert Gardner&Wallace Lambert (1972) Attitudes and Motivation in Second Language Learning Newbury House Publishers
- Stephen Krashen (1986)「ナチュラル・アプローチのすすめ」大修館書店
- 田尾雅治(1999)「組織の心理学」有斐閣ブックス